ねこ問題の変遷・高齢者とペット

数千年前に家畜化されたのにもかかわらず、野生のネコと私たちが“猫”と言われて思い浮かべる身近なイエネコには遺伝子の違いはほとんどないそうだ。それゆえに「人が猫を家畜化したのではない。猫は自ら人と暮らすことを選んだのだ。」とか、「猫は初めから完璧な存在だったのだ。」と冗談半分で言われたりしている。江戸時代の猫と、令和の猫、日本にいる猫と、アメリカにいる猫、おそらく変わりはほとんどない。でも、「猫の問題は？」と問われると、時代や国によって全然違うのではないかと思う。猫の問題は社会の価値観が作り上げるものだ。社会の価値観その時代によって変わる。つまり猫の問題も、その時代によって問題視される部分が変わる。20 年前は圧倒的にノラ猫の問題がメインだったと思う。そして 10 年ほど前から「多頭飼育崩壊」が社会問題として存在感を出し始めた。当時は、「飼い猫は個人の所有物であり、そこに税金を使うことは特定の個人に利益を与えることになるからダメだ。」という言い回しで多頭飼育崩壊に使用できる行政の助成金などほぼ無かったが、2021 年 3 月には環境省が「人、動物、地域に向き合う多頭飼育対策ガイドライン～社会福祉と動物愛護管理の多機関連携に向けて～」を策定、公表した。今では「多頭飼育崩壊は個人で解決することは困難であり、近隣や地域に影響を及ぼす社会問題である。」として助成金が様々なところから出たりしている。そして、今、存在感を放っているのが“高齢者とペット”である。

2023 年に都健康寿命医療センターが発表した「ペットを飼っている高齢者は飼っていない高齢者に比べ、介護費が半額に抑えられている」という調査が与えた社会的インパクトは大きかった。それでも、高齢者が自身の健康上の理由でペットを最期まで飼えなくなってしまう問題に対し、猫の里親希望者への年齢制限を厳しくする風潮が強まっている動物愛護団体と、健康寿命が延びることを売りに高齢者に子犬や子猫の販売を強く勧めるペットショップ業界。誤解しないでもらいたいので少しくどく説明をすると、高齢者とペットの問題も多頭飼育問題も“新しい問題”ではない。ノラ猫の問題も無くなったわけでも古い

問題になったわけでもない。どの問題も昔も今も問題としてずっとあるのだが、その時代時代で、力を入れて解決に取り組むべきだという空気感がある課題に集中する。そういう意味で、今「どういう問題なのか、どうやって解決していけるのか」という皆の関心が高まっているのが「高齢者とペット」の問題である。

ペット飼育高齢者、介護費少ない　都健康長寿医療センター発表

1/30(月) 17:26 配信　18　KYODO

犬や猫などのペットを飼っている高齢者は、飼っていない人に比べ介護費が半額に抑えられていることが460人の調査で分かったとする研究結果を、東京都健康長寿医療センターのチームが30日までに、米科学誌プロスワンに発表した。ペット飼育による社会保障費の抑制を明らかにしたのは初めてとしている。

同センター協力研究員は、世話のために活発で規則正しい生活を送ることが介護サービスの利用軽減につながるとみている。

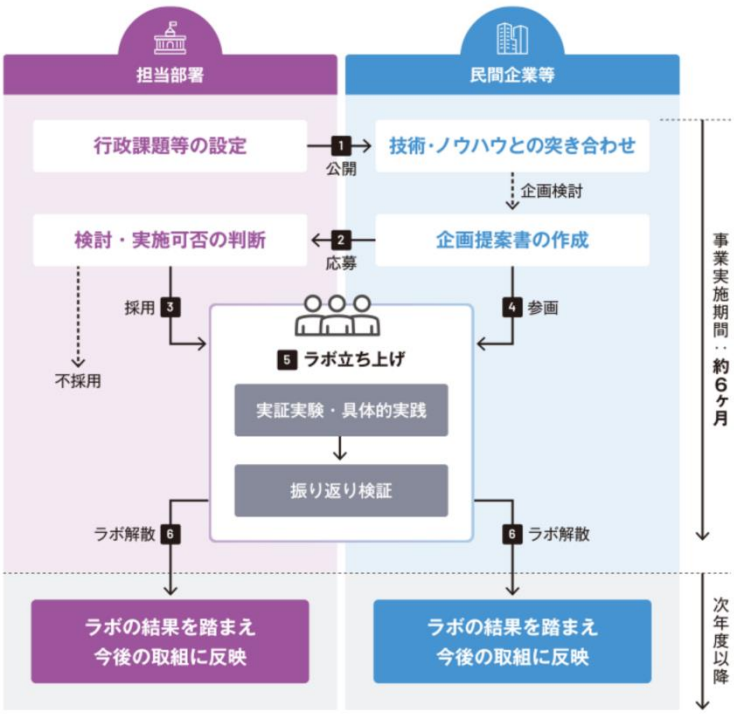
17年に埼玉県鳩山町でペットを飼っている96人と飼っていない364人を比較。介護保険サービス利用費は飼育者が月平均676円で非飼育者1420円のほぼ半額だった。

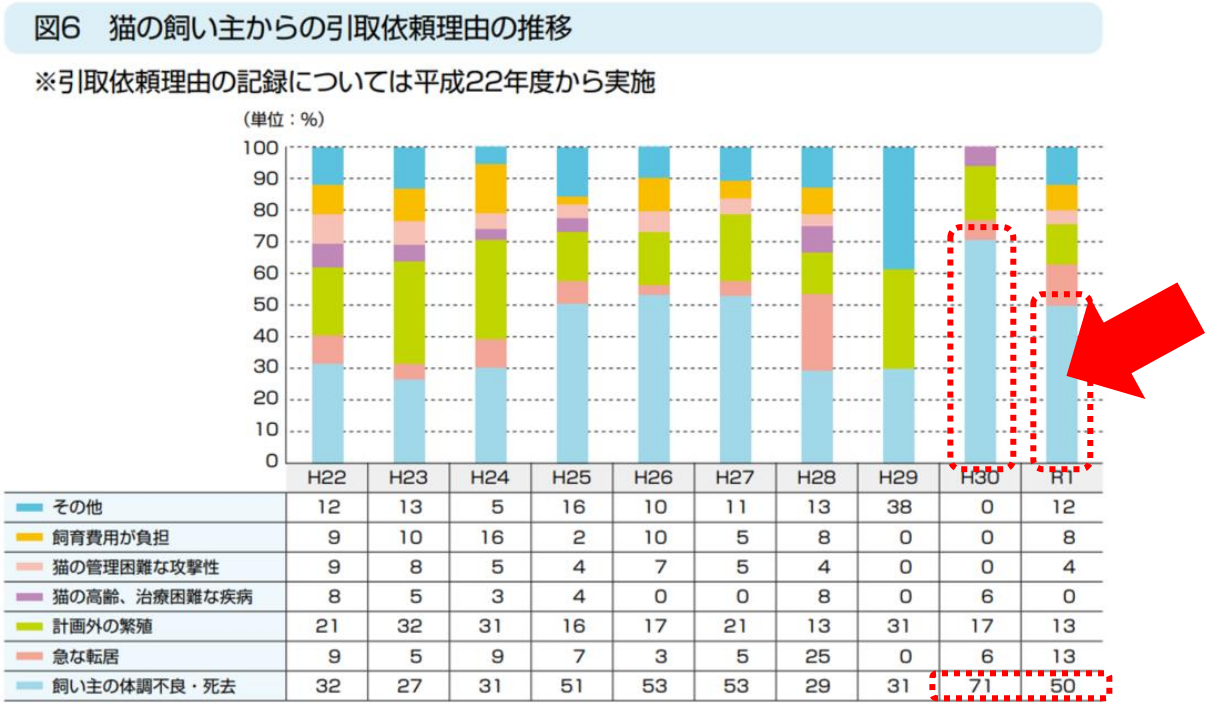
KYOTO　CITY　OPEN　LABO

京都市では、2021 年 7 月から、「KYOTO　CITY　OPEN　LABO」という取り組みが始まった。市役所の各部署が抱える行政課題を LABO のサイトを通して提示し、課題を提示した部署と、提示された課題に対する解決技術やアイデア、ノウハウを持つ民間企業をマッチングし、ラボチームを結成して実証実験等により課題解決を図っていく取り組みだそうだ。

2022 年の 8 月頃、「**高齢者でも安心してペットと生活できる仕組みづくり**」というテーマがラボに募集課題として掲載された。

その背景には、まず動物愛護センターに収容される犬猫の引取り理由の変化があげられる。





	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1
その他	12	13	5	16	10	11	13	38	0	12
飼育費用が負担	9	10	16	2	10	5	8	0	0	8
猫の管理困難な攻撃性	9	8	5	4	7	5	4	0	0	4
猫の高齢、治療困難な疾病	8	5	3	4	0	0	8	0	6	0
計画外の繁殖	21	32	31	16	17	21	13	31	17	13
急な転居	9	5	9	7	3	5	25	0	6	13
飼い主の体調不良・死去	32	27	31	51	53	53	29	31	71	50

図１：京都市動物愛護行動計画　第二期　P.11 より

10 年前は 30%程度にとどまっていた”飼い主の体調不良・死去”という高齢者に関係する理由が、平成 30 年は 71%、令和 1 年は 50%と急激に増加している。そしてこれは、今後増えることがあっても自然に減っていく可能性は低いと見立てられているそうだ。（図１）

さらに京都市は、現状を把握する為に京都市が 2021 年に 65 歳以上の市民 300 人を対象に「高齢者のペットの飼養実態アンケート」を実施している。それによると、高齢者で、ペットを飼いたい方は全体の 57%であるが、そのうち、ペットを飼うことをあきらめている方は 67%。あきらめる理由としては「最後まで飼えるかわからない」を 49%、「急な入院等で世話ができない」を 44%の方が挙げており、健康等を理由に飼い続けられなくなることへの不安により諦める方が多いということが分かったそうだ。また、すでにペットを飼っている人でも「急な入院等でペットの世話をどうするか」について 36%の方、「最後まで飼えるか」について 32%の方が不安に感じている、という結果が出たそうだ。

こういった背景を踏まえ、高齢者とペットの問題を解決する為の取り組みを、「KYOTO CITY　OPEN　LABO」を活用して、2022 年の夏に公募をはじめた。募集要項の中には、前提として高齢者からの引取りが増加している現状は大きな問題だが、ペットとの暮らしは、生活リズムをつくり、孤独を癒し、生活に潤いを与える効果がある。また、ペットにとっても在宅時間の長い傾向にある高齢者との暮らしは、相性が良いはずである。したがって、安易に「高齢者はペットを飼ってはいけない」という社会にはしたくない。という京都市の想いが綴られていた。動物愛護団体の譲渡に対する年齢制限が年々厳しさを

増していくなかで、はっきりと意思表示をした勇気はすごいなと思う部分と、「ダメ絶対」のスローガンで解決した社会問題を知らないので、高齢者のペット飼育を認めつつも、それによって生じる問題を最小限に留める対策を検討するべきだと私も思うので、ぜひ応募したいと思った。

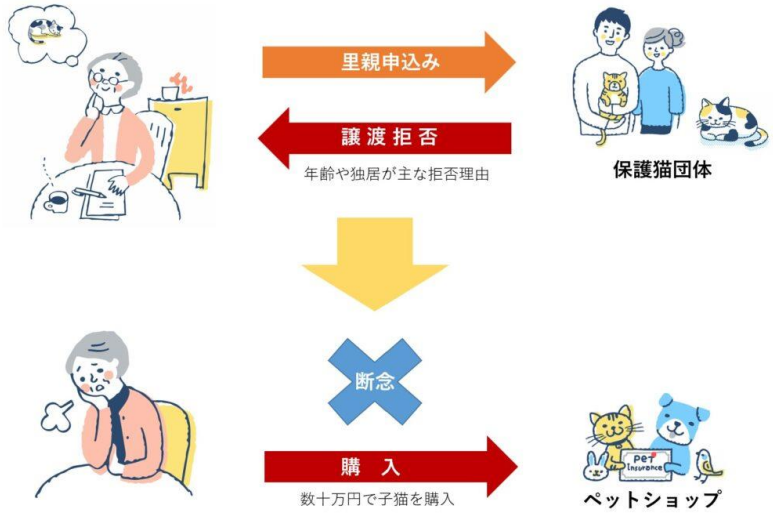
京都市が解決したい課題として掲げているのは次の３つ。

1. 高齢の飼い主が十分に世話ができなくなった時に、ペットの世話をする等、飼い続けられるように支援する仕組みがない
2. 高齢の飼い主が入院や亡くなった時に、ペットを次の飼い主へつなぐ仕組みがない。
3. 高齢の飼い主からのペットに関する相談に対応する場がない。

これらの課題を解決するようなサービスをつくり、高齢者が安心してペットと暮らすことを選択でき、なるべく長くペットと暮らし続けられるような社会を目指したい。と結ばれていた。

背景の補足

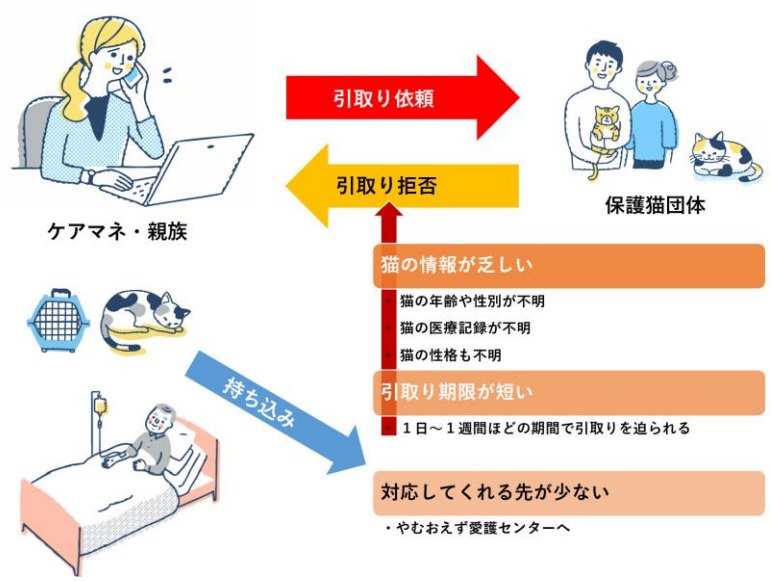
高齢者とペットの問題は、京都市に限ったことではない。保護猫業界的な視点で背景を補足すると、猫を飼いたいと思った高齢者が保護団体に里親の申し込みをしても、年齢や独居を理由に最期まで飼い続けられることが困難な可能性があるとして、断られてしまうケースが多い現状がある。親族で万が一の時に猫を引き取ってくれる猫後見人がいるのであれば、譲渡も可能という付帯条件を設けている団体もあるが、ペットを飼いたいと思う方ほど、近しい身内がいないことも多い。



断られた高齢者は、やむなく猫と暮らすことを断念するか、諦めきれない場合は、数十万円のお金を出してペットショップから子猫を購入する流れになる。

そして、飼い始めるのが子猫になってしまうがために、最後まで飼い続けることが難しく、

保護団体や愛護センターに引取り依頼をせざるを得ない状況になってしまう。しかし、飼い主さんが倒れている状態では、ペットの情報（年齢・性別・医療記録・性格など）が乏しいうえに、猶予期間が短くボランティアの保護団体では対応できないケースがほとんどだ。



愛護センターに収容されると、運よく次の飼い主さんへ譲渡されるケースもあれば、ペット自身も高齢であったり、飼い主さん以外には攻撃的であったりといった理由から、殺処分の対象になってしまったり、持病があったりして環境の変化のストレスに耐えられずセンター内でなくなってしまうこともある。そして、保護団体はさらに高齢者への譲渡に慎重になってしまう、という綺麗な悪循環ができあがっている。こういった現状を踏まえ、高齢者の方に無期限に保護猫を預かってもらうサービスや、ペットと一緒に入居できる施設など様々な取り組みが各地で試されているが、まだまだどこも試行錯誤の段階だと思う。

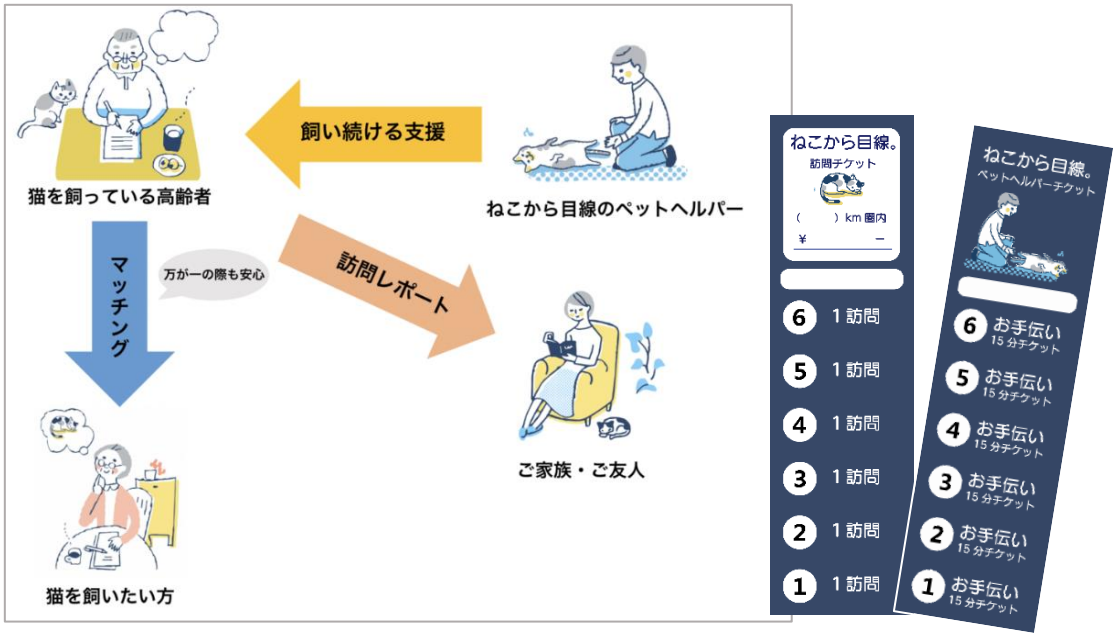
KYOTO　CITY　OPEN　LABO へのエントリー

高齢者とペットの問題に対する企画案は人もねこも一緒に支援プロジェクトを立ち上げた頃に作っていた。ただ、NPO で動かすにはリスクが高く、人件費を回せる事業としての設計がしきれずにお蔵入りとなっていた。ただ、今はねこから目線。の会社があり、頼れるメンバーがいて、収益化に時間がかかってもしばらくは補えるくらいの金銭的な体力もできた。そこで昔の企画を社内でブラッシュアップして、持続可能な収益事業として組み立て直しラボに応募することができた。企画タイトルは、「飼い続ける支援」と「飼い始める支援」。飼い猫に対するホームヘルパーサービスと、高齢者向けの保護猫譲渡サポートの２本柱で成り立

つサービスです。いきなり“です”が出てきて読んでくださっている方は違和感しかなと思うのですが、新しい取り組みへの不安なのか、自分の無意識的な何かが働いて、である調では非常に説明がしにくいので、ここからは「ですます調」で書かせてください。笑

■飼い続ける支援（猫のホームヘルパーサービス）

飼い続ける支援は、すでに猫を飼っている方が少しでも長く、安心して猫と暮らし続けられるようサポートするペットのホームヘルパーサービスです。既存のペットシッターさんは飼い主さんが不在の時に、ご自宅を訪問して代わりに猫のお世話をするお仕事ですが、ペットヘルパーは飼い主さんがご在宅の時に、ご自宅に訪問して猫さんのお世話をお手伝いしたり、飼い主さんと猫さんの健康確認をさせていただくサービスです。



爪切りやトイレの丸洗いなど、高齢じゃなくても一人でするには大変なお世話。そういったことを月 1 回の訪問からサポートさせていただきます。単発のペットシッターではなく、月々の定期訪問を契約いただく形となり、最低月 1 回の訪問、半年契約から利用できるように設定しています。料金は基本 1 訪問 3,000 円としており、内訳は出張交通費 10km1,000 円＋お手伝い 15 分 2,000 円という内容です。毎回の訪問時に現金のやりとりをすることを避けるために、コーヒーチケットのような 6 枚綴りのチケットをまず購入いただき、毎月の訪問毎に 1 枚チケットをもぎらせていただきます。お世話のお手伝いは全く必要ないけれど、いざという時の保険のように予防的にご利用いただく方の場合は、15 分間ひたすら猫さんと仲良くなるための時間に使わせてもらっています。「今日はトイレ 2 つを丸洗いしてほしい」といった要望がある場合は、30 分ほどのお手伝いになりますので、「では、今日

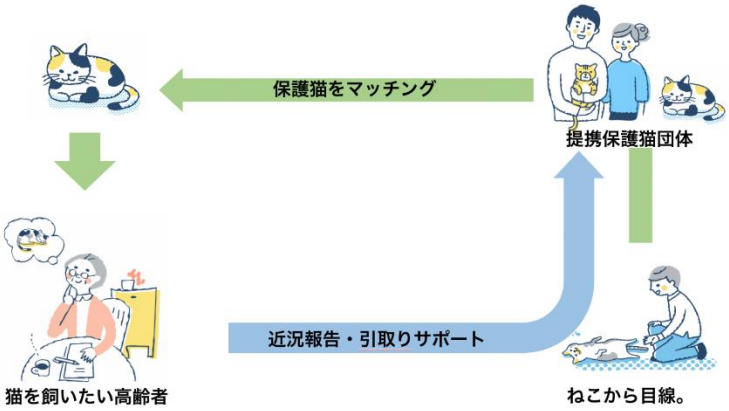
はチケット２枚もぎらせていただきますね！」というようにやり取りをしていきます。

このサービスの第一の狙いは、少しのサポートさえあればまだ猫さんと暮らし続けることができる方が、なるべく長く暮らし続けることができるようサポートすることで、飼い主さん宅で一生を終えさせてあげたい。ということです。それは、猫のためでもあり、猫を愛する飼い主さんの一番の望みでもあると思っています。保護できるシェルターを用意するという方向ではなく、そもそも飼い猫が保護猫にならなくていいように支援する。それが第一の狙いです。

もう一つの狙いとしては、ペットヘルパーとして、ねこから目線。のスタッフが定期訪問させていただくことで、猫さんの性格や年齢、生活スタイルといった情報を把握しておくことです。また、定期訪問を行うことで、飼い主さんの状況も、毎月聞くことができるので、万が一飼い続けることが困難になりそうになったら、先手を打って新しい飼い主さんを探すお手伝いをさせていただいたり、猫と一緒に入所できる施設を探したりするサポートができます。もちろん、シニアだったり、人馴れしていなかったりと、全ての子に里親さんを見つけてあげることはできないと思います。それでも、やってみる価値はあると思っています。100％の解決策にこだわって、悩むことや心を痛めることに時間を使い、結果何もしないのではく、今思いつく中で、自分が提供できる最大限のことをやってみたいと思っています。

■飼いはじめる支援（保護猫譲渡サービス）

飼い始める支援は、これから猫を飼い始めたいと考えているものの、自分の年齢を考えると少し不安がある方、後見人となるご家族がおらず、猫の譲渡を断られてしまった方も安心して猫を飼うことができるように、ねこから目線。が提携保護団体から、譲渡対象の猫さんを紹介させていただくサービスです。保護猫団体さんも、高齢の方が猫を飼うことに否定的なところばかりではありません。譲渡後の見守り体制さえ整えば、積極的に譲渡したいと考えている団体さんも多くいます。そこで、ペットヘルパー訪問の度に、猫さんの近況報告を保護団体さんにさせていただくことを条件に、万が一の時の引取り保証をしていただくという仕組みです。里親さんと保護猫の里親譲渡のマッチングを長年実施しているねこから目線。が間に入ることで、猫さんの安全と飼い主さんの満足度、保護団体さんの安心感を最大限に引き出せるのではないかと考えています。



最近増えている猫の安全を無視した短期レンタルサービスとはかなり異なり、基本は終生猫の飼い主になるつもりの方にしか譲渡はしません。「1週間だけ猫と暮らしてみたいわ」といった希望には対応できません。猫を飼う事による癒し効果は、自分が猫に対して最大限の癒しやケアを提供することによって、満足そうな猫の姿を見て、かえって自分が癒されている“癒し”にこそ意味があると思っています。一方的に関係性の無い動物を撫でまわして得られる癒しは薄っぺらく効果の短いものです。これは、1965年にリースマンが提唱してた「ヘルパー・セラピー原則（「他者を援助することは、(結果的に)援助する人が利益を受けている」とする考え方)」に近いと思います。

また、飼い続けることが困難であると判断した場合、猫を引取りなおさせていただく特約付きの譲渡契約を交わさせていただきます。飼育環境によっては譲渡できない場合ももちろんあります。猫の安全に最大限配慮することは、ねこから目線。として絶対に譲れないポイントです。

サービスリリースの順番がいつもと逆という不安

サービスについて長々と説明をしました。自分でも説明長いなと思います。おそらくそれは、今回のサービスはこれまでのねこから目線。のサービスリリースの流れと真逆だということが大きな原因だと思います。内心の不安が理論武装というか、説明過多という感じに表れているのかなと思います（笑）これまでのねこから目線。のサービスは、なんでも猫の相談に対応する便利屋として対応しつつ、その中で多い依頼を、より広げるためにサービスとしてパッケージ化していく、という「対応案件の蓄積」からの「サービス設計」という流れがほとんどでした。先に課題を受け、理屈や予想、事前ヒアリングといった会議を経てサービスを設計する、というやり方は始めです。

サービスを発表して、「いい内容だね！」と言っていただくことは多く、大変ありがたいのですが、本当に必要とされているのか、必要だとこちらが想定している方々にどうやって届けていけるのか、そういった部分を今は試行錯誤しながら頑張っています。やったものの、契約0人です。とかになったら、まじで笑えないですし、自分としてはぜひ回していきたいサービスだと思っているので、頑張っていきたいと思います。また、いつかのマガジンで、このサービスがその後どうなったのか報告できたらと思います。

おわり

小池英梨子
ねこから目線。～保護猫とノラ猫専門のお手伝い屋さん～　代表
NPO法人FLC安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク
「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表
ご意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com